
G . I . I 症候群

翡翠殿夢宇

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

G・I・I症候群

【コード】

N2423D

【作者名】

翡翠殿夢宇

【あらすじ】

男は街で汚い男に出会った。その男はとある病に感染していた・

G・I・I 症候群
作、翡翠殿 夢宇

「ねえねえ、ちよいとそこのお兄さん。わしの最新のギャグを聞いてくれよ」

ぼくは街中で声をかけられた。ぼさぼさの頭に乱れた衣服、あまりかわりになりたくはないいでたちである。

「急いでますので・・・」

そそくさと逃げるぼくの背広の端をしっかりとつかむ、泥んこの手で・・・

『クリーニングしたばかりなのに!』

ぼくの気持ちを無視し、男は一向に手を離す気配がない。無理に逃げるよりもそのギャグとやらを聞いてやったほうがよさそうだ。

「わかりましたよ、少しだけ聞きますからまずはその手を放してください」

ぼくは男の手を振り払い、背広を整えた。すそには泥汚れの跡がすっかり残っている。少しむすつとしてぼくは吐き捨てるように言った。

「早く家に帰りたいんですから、早くしてくださいね」

「よつよし、面白すぎて笑い死ぬなよお」

男は軽く咳払いすると、力強くその言葉をつぶやいた。

「ふとんがふつとんだ!」

ぼくの体を冷たい風が吹きぬけ、今日の最低気温が1度下がった。「・・・はいはい、確かに聞きましたよ。それじゃぼくはこれで失礼しますよ」

ぼくは足早に男のそばを離れた。男はぼくの後ろ姿を見送り細く微笑んだ。

家に帰るとなんとなく熱っぽいことに気づき、今日は早めに布団に入ることにした。

「あの男の寒いギャグで風邪でもひいたかな？」
・・・これはまったくの間違いというわけではなかったのだ。

次の朝になつても一向に熱が引かない、ぼくは会社を休み近くの病院を訪ねることにした。

道に出てタクシーを止める。タクシーに乗り込むと人のよさそうな運転手が声をかけてきた。

「お兄さん、どちらまで？」

「ああ、K病院までお願いします・・・」

「大丈夫ですか、お客さん、なんか顔色が悪いみたいですよ」

バックミラーから運転手が覗き込むようにして尋ねてくる。ぼくは急に胸の痛みを覚えその場にかがみこんだ。

「おっおっ客さん・・・」

あわてる運転手の声があるが、そんなことを気にしている余裕はなかった。胸が苦しく息ができない。しかし助けを求めたつもりはぼくの口からはこんな言葉が・・・

「K病院に内科はナイカ？・・・はっ・・・」

ぼくはあわてて両手で口をふさいだが、運転席を冷たい風が吹きぬけ車内は冬と化した。

十分ほどの道のりをタクシーは暖房を最大にかけて走りK病院に到着した。

病院についてからも待合室で待つ間、数分おきに起こる発作のために周りの患者にギャグや駄洒落を言い続けた。しかもどれもまったくと言っていいほどつまらなく、ぼくの呼ばれる頃には待合室の天井にはツララができるほど寒々としていた。

名前を呼ばれ机とベットでいっぱいの狭い診察室に入り椅子に腰

を下ろした。医者はお決まりの質問を2、3行った後ぼくの胸に聴診器を当てながら険しい表情をした。

「むむむ、これは・・・」

医者の顔がさらに強張る。

「先生、ぼくはそんなに悪い病気なんですか?!」

あわてるぼくに医者は表情を崩さず静かに病名を告げた。

「あなたは『G I I 症候群』です」

ガガーン! 鍵盤を激しくたたたく効果音が頭に響き世界が真っ暗になる。聞いたこともない病名だが、どうやらとんでもない病気にかかってしまったようだ。ぼくは恐る恐る医者に尋ねる。

「いったいそれはどんな病気なんですか?」

医者は小さくうなずくと病気について話し始めた。

「G I I 症候群。正式名称を（G）ギャグ（I）言わずに（I）いられない症候群というのだ」

「ふざけないください! ホントのことを話してください!」

激しく問い詰めるぼくを抑えて医者は言葉を続ける。

「ふざけてなどいない。この病気は非常に感染力が強い、空気感染ならぬ『ギャグ感染』するんだ、周期的に起こる発作によって引き起こされる『寒いギャグ』を聞いた者はみなG I I 症候群になってしまうんだ」

ぼくは昨日の男を思い出した。間違いない、あの時うつされたんだ。

「君は今後隔離病棟にてリハビリを行う。一切の面会は禁止だ。約1年の療養期間の後退院が許可される。これは世界赤十字機構で定められている決定事項だ。これ以上この病気を広めるわけには行かないのでな、我慢してくれ」

医者がカルテに病状を書き込み始めたとき再びぼくの体をあの発作が襲った。

「ああっ、ギャグが言いたいっ!」

体中が振るえ言葉が喉を駆け上がっていく。

「いかん！我慢するんだ！」

「駄目、です・・・我慢できない・・・わああああ、聞いてください
iiiiiiii!!!」

「だめだあ」

「ドカンがドツカーン!!!」

それから1ヶ月G I I 症候群は日本全国、そして全世界へとすごい
スピードで広まった。

寒いギャグに包まれた地球は急激に気温を下げ、史上最大の氷河期
を向かえ人類は滅亡した・・・。

「と、これが前史文明を持った『ニンゲン』という種の絶滅の原因
と考えられています」

新たに文明を築いた新生命体が歴史の授業を行っている。

「G I I 症候群はいつ何時発病するかわからない恐ろしい病気です。
みなさんも十分に気をつけてくださいねもう寒いのはこおりこおり
(氷氷)ですからね」

数秒の沈黙。そして、教室の中を冷たい風が吹きぬけた。

END

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2423d/>

G . I . I 症候群

2009年3月24日09時43分発行